

# 北宋の修武窯

小山 富士夫

北宋は中國陶磁の黄金時代とされ、定窯、汝窯、東窯を始め、不朽の名磁をのこした窯がいろいろとある。然し北宋諸窯のうち今私の最も心をひかれ、これに就いて知りたいと思つてゐるのは河南省の修武窯である。修武窯は從來これに關する何等の記述がなく、世間でも全くその存在を無視してきた窯であるが、北宋の窯のうち作風に最も變化があり、作行の特に優れているのは修武窯である。修武窯と思われるものはどれを見ても藝術的な香りが高く、清新簡明な美しさに輝き、また驚くほど近代的な感覺がみなぎつてゐる。見方によつては定窯よりも汝窯よりも魅力のある窯だが、こんな窯のあることを從來全く知らなかつたのは不思議なようである。今後修武窯は必ずその重要性が認められ、ひろく世界的に深い關心をもたれるようになるう。

私が始めてこんな窯があることを知つたのは昭和十六年北支を旅した時である。北京でめぐりあつた大阪の小澤龜三郎氏から、そのころ北京の古玩舗の間で問題となつてゐた黨陽峪という窯のあるこ

とをきき、その窯の遺品についていろいろと教えられた。その時これは容易ならざる、北宋で最も重視すべき窯だと思つた。爾來私はこの窯の遺品と推定されるものに特に深い注意を拂つてきたが、然し實際に窯跡を踏査したわけでもなく、またよるべき資料・文獻が全くなかつた。誰にきいても、そんな窯があるのかといつたわけで、全くとりつくしまがなかつた。従つて修武窯については拙著「宋磁」や「北支紀行」に極く簡単に黨陽峪という窯があることを紹介しただけで、かつてこの窯に就いて書いたこともなく、また書きようもなかつた。殊に磁州窯と修武窯との區別がどうしてもつかず、早まつた發表は徒に世間をまどわすだけだと恐れてゐた。

修武窯を知るには何としてもその古窯址を踏査し、窯跡に落ちてゐる陶片を調べるより他に方法がない。私が北京でこの窯のことを知つたのは、第一回の豫備調査旅行を終え、ついで定窯々址を發見した後のことである。第一回の旅は北京から石門を経て太原に二泊、潞安・澤州と山西省を縦斷し、河南省の清化鎮にぬけて新郷に出、

數日開封に滞在して北京に歸るかなり大きな旅だった。その途中清化鎮に一泊し、清化鎮からは汽車が通じていたので、次の柏山驛に下車し、驛の近くの甕を焼いている窯を見にいったことがある。柏山は司馬温公の生れた土地で、満月臺にはその碑があつたが、當時その附近は治安が極めて悪く、危険だからとめるのを無理に警備兵をつけてもらい、驛の近くにある大きな甕を焼いていた今の柏山の窯だけは見てきた。その時修武驛の近くにも磁州窯そのまゝの白碗を焼く窯があるとき、こゝも踏査したいと思つてしたが、治安が更に悪く、日本人は驛から一步も出られないときいて断念した。もしその時修武の古い窯のことを知り、殊に今考えているようにこの窯の重要なことがわかつていたら、どんな危険を冒してでも踏査したものをと、折角その傍らを通りながら調査の機会をにがしたことを残念に思つている。

一昨年蘭山順吉氏の好意により拙著 *Story of the Old Chinese Ceramics* を公にして以來、幾人かの知己を海外にも得た。特に英國のイングラム卿 (Sir Herbert Ingram) と親しくなり、今でも月に一二回は御互いの意見を交わしているが、昨年の秋イングラム卿から Orvar Karlbeck がスウェーデンの學術雑誌 *Ethnos* (No. 3) に発表した *Notes on the Wares from the Chiao Tso Potteries* と題する論文を贈られた。イングラム卿もたつた一部しかないからといつて、わざわざ各頁をキャビネ版にとり、寫真十五葉を送つて下さつたことはなみなみならぬ厚意と深く感謝している。早速通讀

したところ久しく私の知りたいたと思つていた修武窯址の調査報告であることを知り、躍らんばかりに嬉しかつた。時を同じくして杉山定敏氏新收の私が修武窯址出土と推定する一括陶片を見て、今更に修武窯のすばらしさに心をうたれた。

然しカールベック氏の報告をよんでも、いろいろ疑問の點が多く、まだ修武窯については明確な概念がもてない。殊に磁州窯との區別が今猶はつきりとせず、これを公にすることはあやまちを後に傳える結果になりはしないかと恐れている。省みて修武窯の發表は私がこの窯址を踏査した曉にしたいとも考えているが、今日我々は中國へ渡る途が全くとざされ、いつこの望みが果せるともわからない。また最近私は何を見ても修武窯に見え、しきりに修武窯修武窯といふので、しばしばその説明を求められる。曖昧模糊とした點が多く、また極めて大膽粗雑な説ではあるが、とにかくカールベック氏の報告を紹介し、多少の私見を加えて世に問うことにした。

## 一

修武縣は河南省即ち今日の平原省の北部、京漢線の新郷から清化鎮に通ずる支線の略々中央に位している。南方約七里ほどに黄河が流れ、北方約三里ほどに太行山脈が連り、これを境界線として山西省と接している。北宋の都だつた開封の西北約二十七里、黄河をへだて、鄭縣とは、相對峙している。

修武の古窯址は縣治の西北六七里ほどの當陽峪にあるようであ

る。私は初め黨陽峪と教えられたが、修武縣志は乾隆版も道光版もともに當陽峪と記し、縣治の西北四十五里(中國里)、即ち我國の七里半に位すと書いてあるが、實際はもつと近いようである。

カールベックはこの窯を Chiao Tso とよんでいる。チャオ・ツォーを漢字で何と書くのか、いろいろ中國の地名辭典を調べてもな、手近な地圖にもこれに該當する地名が見當らない。また修武縣の舊名でもないようだし、人にきいてもよくわからなかつたが、最近の詳しい地圖を調べた藤田國雄君から、焦作鎮(チャオ・ツォー・チエン)であることを教えられた。焦作鎮は修武縣から西へ約四里ほどの地點にあり、修武の西に同名の驛がある。カールベックの報告によれば、古窯址は焦作鎮の北約四哩の Potter's Valley にあるとのことである。これが當陽峪にあたることは間違いないようである。

従來名のなかつたこの窯を何とよぶのが正しいか、まだきまつてゐるわけではない。カールベックは焦作窯とよび、北京では黨陽峪とよんでいるが、私は寧ろ修武窯とよぶ方がよくなるかと思ふ。實際には當陽峪にあり、また焦作鎮の方が修武縣よりは遙かに窯に近いようだが、一般の地圖にもなく、地名辭典にもものつていない小さな地名をつけるよりは、誰にでもわかる縣の名をつけた方が適當のようである。例えば定窯は實際には定縣から十七里も距つた澗磁村にあり、汝窯は大峪店や歸仁里、磁州窯は磁縣の西七里の彭城鎮、龍泉窯は大窯・金村その他附近數十箇村に散在しているが、縣

の名をとつてこれを定窯・汝窯・磁州窯・龍泉窯とよんでいるように、この窯も縣名をとつて修武窯とするのが適當だと思ふ。

## 二

修武窯を始めて發見したのは故スワロー氏 (the late R. W. Swallow) である。スワロー氏は永く開封に住んでいた熱心な愛陶家で、一九三三年北支シンヂケイトの支配人として焦作鎮に移つてからは、特にこの窯に興味をもつた。當陽峪の農民たちから盛んに陶片を買い集め、修武窯の陶片の一大蒐集を始めた。また使用していた中國人に命じて修武窯に関する古文獻を漁り、いくつか手に入れたようである。

スワロー氏が入手した修武窯に関する文獻が何という本かまたよくわからない。東洋文庫所藏の修武縣志(乾隆版及道光版)には一切この窯に関する記述がない。或いはこれ以外の縣志かも知れないし、縣志以外の文獻古文書かも知れない。恐らく日本では入手困難かも知れないが、せめて題名だけでも知りたいものである。カールベック氏はその一部を英譯しているので、これをそのまま轉載することにする。

崇寧年に焼いた磁器は特に光澤が強く、當時玉村には百以上の陶工の家があつた。いろいろの色釉を焼いたが、そのうち特に紅と白とが有名である。Pai Ling (白琳) とよぶ陶工は當時最も有名で、家門繁榮のために祠を建てたが、これを玉帝廟とよんでいる。これに次ぐ名工は Cheng Li (陳里) で白琳の秘法をすべて知つていた。陳には T'ao Chun (陶春) とよぶ弟子があ

つたが、陶は陳よりも更に才智にたけていた。この三人の陶法や作風は他の陶工たちと全くちがいがい、その作品が特に優れていたのは技術的に群をぬいていたためである。白琳は陶工であると同時に優れた學者でもあつた。

この土地には三百六十軒の富豊かな家がありそれぞれ巨萬の財を藏していた。連日饗宴を催し、そのたびに大旗を屋上に掲げたので、天目ために暗かつたといわれている。また官憲は日ごとに掲げられる大旗に疑惑の目をかがやかし、軍兵を送つてこの地を陥れようとしたこともある。(陶工の名は假稱)

修武窯に關する記事はこれ以外に見たことがなく、またスワロー氏自身書いたものもないようである。

カールベック氏はスエデンの技師だが、同時に中國の考古學や古陶磁にも深い關心をもち、杭州の南宋郊壇窯を始め中國各地の古窯址を踏査した人である。一九三四年の夏、即ちスワロー氏が焦作鎮に赴任した翌年、スワロー氏が招かれて修武窯の調査をした。カールベック氏はスワロー氏が蒐集した陶片のすばらしいのに驚き、千變萬化その種類の多いのに更に驚いた。焦作鎮から北方約二里の山中にある當陽峪の古窯址群を踏査したが、その報告の概要を略記すれば次のようである。カールベック氏の原文に従つて焦作窯とするが、前述のように焦作窯は即ち修武窯のことである。

## 三

焦作鎮の北一里餘りの線に太行山脈が迫り、その山裾に複雑にきざまれた澤山の谷がある。當陽峪はこのうち最も大きな谷の一つで、幅廣い谷が奥深く入つてゐる。この谷は今日一面の畑となつてゐる

## 四

が、昔窯のあつた地點は谷の入口から一哩ほど入つたところて、谷の兩側は切立つた黄土の斷崖となつてゐる。高さは數尺からところによつては二十尺以上もあるが、この斷面に窯がいくつか埋つてゐる。この谷に窯がいくつあつたかよくわからないが、少くも四百以上はあつたろう。焦作の窯は今日北支でよく見る地上に煉瓦で築いた、兜形の石炭窯ではなく、黄土の斷面を掘つた一種の穴窯で、丁度蜂巢のような形をしている。地上につき出た煙突は勿論とつくになく、窯も埋れてわからないものが多いが、黄土の斷面にとつてどこか匣や窯壁が露出し、そこにもと窯のあつたことを物語つてゐる。

窯址に散亂してゐる匣サヤの殘片は實に夥しい數で、道路の階段や農家の土壁はすべてこれで築かれてゐる。匣は圓筒形の底の平たいものもあれば、淺くて底の出ているものもある。どれもガサガサな荒い土で作られ、ほど今日の匣や、宋代各地の古窯址から發見されるものところがわなない。

この谷を挟んで兩側に小高い岡がある。西側の岡の上に玉村という部落があり、この部落に宋代陶工たちが住んでゐた。部落をぶらぶら歩いて見たが、附近一帯にも無數の陶片が散亂してゐた。釉薬のかゝつたものもあればかゝらないものもあり、陶器もあれば磁器もあつた。紙のように薄い白磁の器地に白色の釉薬のかゝつた美しい陶片も發見したし、いろいろの釉薬のかゝつたきれいな陶片がそこそこ落ちてゐた。

この谷を登りつめた一番の奥に玉帝廟とよぶ祠がある。この廟の壁に古い碑文が嵌込んであるが、残念なことに一部は缺けてなくなつていた。銘文によつてこの廟は、徽宗皇帝の崇寧元年に建立されたものであることがわかる。傍らにいくつかの重修碑があり、そのうち一つには崇寧六年の銘があり、その他はずつと降つて明の嘉靖や清朝のものである。

窯のあつた谷や玉村の部落一帯に散亂している陶片は夥しい數で、またその種類の多いのに驚いた。この谷で焼いたやきものに就いては一切何の文獻にもないが、幸いスワロー氏の發見によつてわかつた。さもなければこの重要な窯は永遠に葬られてしまつたかも知れない。

焦作の窯跡で先ず目についたのは俗に練上手とよんでいる美しい陶片である。白い磁器と赤い土を練りあわせたもので、これこそ特別の名工が作つたものかも知れない。練上手の陶片は窯跡でも發見したし部落でも發見したが、スワロー氏は非常な數蒐めて居り、これを見ると器物の種類や形がほゞわかる。

珍らしいと思つたのは定窯風の純白の磁胎に褐色の釉薬のかゝつたすばらしい陶片をたつた一點だけ發見した。非常に上手で、一見後世のものではないかと疑われるものだが、均窯風の陶片と一緒にたしかに窯跡で見つけたので、宋代のものに間違ひなからう。純白の磁胎に鐵分の多い赤土を化粧し、その上からやわらかい栗色の釉薬をかけたもので、光澤が特に強く、作行は紙のように薄い。スワ

ロー氏のコレクションにもこの手は餘りなく、平底の碗や、高台の釉薬をはがした碗片がいくつかあつた。然し完器はかつて見たことがない。

玉村の部落では上手の白磁片を相當に發見した。作が薄く、器地が磁胎で、これに白釉がかゝつているが、こなごなになつた小さな破片ばかりなので、器物の種類や形はわからなかつた。

以上は焦作窯で焼いたうち、特に優れていると思われるものだが、當時焦作窯ではひろく一般の需要を充たすため北支系のいろいろの陶磁器を夥しい量焼いていたようである。

特に興味のあるのは磁州窯を模したいろいろの手である。ホブソンは大英博物館の案内記に『磁州窯の文様には特徴のある二つの型がある。一つは黒または褐色で自由奔放な文様を描いたものだし、一つは白化粧を搔落したものである。ともに頗る印象的な文様だ』と述べているが、焦作ではこの兩方の種類を相當澤山に焼いている。スワロー氏はこの種の陶片もいろいろと蒐めているが、黒繪文様のものは壺甕の類が多く、搔落の手は主として枕が多い。器地は堅い半磁質で、色は卵殻色のものもあり、薄灰色のものもあり、暗い褐色のものもある。土色の淡いものは多くこし土だが、濃いものは荒く、澤山に黒い砂粒をかんんでいる。すべて白化粧をし、その上に黒や褐色で文様を描いているが、化粧は生々とした白で、多少クリム色を帯びている。また定窯によく見る涙痕のあるものもあれば、釉中に魚子紋即ちこまかい氣泡が一ぱいあるものもある。

内面には普通黒褐色の釉薬がかゝっているが、白釉をかけたものもある。またたつた一片灰色の釉薬のかゝつたものも見だが、釉のかゝつていない破片は二片だけだつた。鐵繪文様は概ね鳥・虫・竹・花・唐草の類で、白地に黒または褐色で宋獨特の自由奔放な筆致でかきなぐつてある。

搔落の手は器地が堅い半磁質で普通赭色または暗褐色を帯びているが、時には卵殻色のものもある。外面を白化粧し、これを搔落して文様を描き、その上から淡クリーム色の白釉がかゝっている。従つて文様は灰色もしくは淡い褐色、場合によっては黒に近い地に白で描かれている。文様は唐草だとか象徴的ないろいろの曲線を自由潤達に彫つたものが多い。

焦作ではまた俗にいう均窯を焼き、鉢の破片を澤山に發見した。器地は灰色の堅い半磁質で、これに美しい均窯風の釉薬が厚くかゝっている。普通釉薬にすつぱりとつけ、腰以下は露胎で、作行は下手のものが多い。貫入のあるものもあればないものもあり、釉色は火の加減で美しい天青色のものもあれば、暗い藍色のものもあり、灰色のくすんだものもある。

小さな色見をいろいろ發見したが、色見の中には仲々上手のものがあつた。また一・二・四・六といった番號を刻した色見も發見したが、どうも番號は釉薬を區別したものゝようである。

番號のある均窯といえは誰でも均窯のうちでも特に優れている水盤、植木鉢の類を連想する。特に上手なこの手の均窯にかぎつて底

に必ず番號を押し、一から十までであるこの番號は従來器の大きによつてちがうとされてきた。即ち一が一番に大きく、十が一番に小さく、番號の数が多くなるほど器が小さくなると考えられていた。

この番號は釉色によつて區別したものか、或いは器の大きさによつて押したものか、今のところどちらともいえない。然し、周知のように、汝窯・官窯・龍泉窯といったわりあい釉色の變化の少ない窯のものに押した例はないが、これに反し特に釉色の變化の多い均窯にだけ押してある點は注意すべきであろう。

猶この他焦作では二種類の陶磁器を焼いている。一つは人間・動物・塔・小さな壺・水注の類を象つた玩具で、純白の磁胎に薄クリーム色の釉薬が厚くかゝっている。この種の玩具は澤山に窯跡でも發見したし、これを造つた土型も見つけた。この種の玩具は北部甘肅省の蕭州にもあり、ペリオは焦作と磁縣の略々中央に位する彰徳府からも出土したと報告している。

もう一つは所謂宋三彩で、煉瓦のような赤茶色のやわらかい器地を白化粧し、これに緑・黄・白の低火釉を薄くかけたものである。唐三彩によく似ているが、唐の三彩にくらべると作風がどこかたく、内面には奔放な宋獨特の魚・兔・唐草などの線彫文様がある。

#### 四

以上はカールベックの報告を大體原文通りに抄譯したのだが、これに多少の解説を附してみたい。

修武縣志を見ると大體この記述のように、縣の北邊には大行山脈が迫り、その麓には天門谷・虎谷・溫盤峪・澗三溝・老牛河・老子溝・獅澗などといった谷や河が澤山にある。このうち最も大きな谷は當陽峪で、縣志には

當陽峪 在峪鄉其西爲呂澗山  
縣西北四十五里

とある。澗郷という村に屬し、その西に呂澗山とよぶ奇峯がそびえている。その山中には圓融寺という寺があり、東麓には鳳凰寺という寺がある。呂澗山の西には譚胡嶺、當陽峪をへだて、東にもいくつかの峯が連なり、地形の複雑な地帯のようである。縣志卷首の縣境大行山全圖を見ると、當陽峪の西の丘の上に玉村の部落があり、谷の奥、大行山脈の中腹に、玉帝廟もある。ほゞカールベックの記述の通りで、窯跡の地點の推定もつく。

私が北支滿洲を踏査した經驗からいうと、今でも昔でも、大きな製陶地のあるところは、豊富な原土・燃料にめぐまれていてと同時に、必ず豊富な水がある。例えば滿洲の三大古窯址といえる乾瓦窯・江官屯・撫順はいずれも河に臨んでおり、今日北支最大の製陶地である磁州窯は、そのすぐそばに黒龍峒とよぶ北支にめずらしい清冽無比な水が滾々とわき出ている大きな泉がある。また北宋隨一の名窯とされていた定窯のそばにも磁州と同じように豊富に水がわく龍泉峒があり、これを利用して原石釉料を處理していたのであろう。カールベックの報告にも縣志にも特にこのことは書いてないが、當陽峪は地形からいっても水の豊富なところのようである。

修武の窯は黄土の斷面に鑿つた一種の穴窯のようであるが、簡単なカールベックの記述では實際にどんな様式の窯だったかどうもよくのみこめない。今日の北支の窯は地上に碗を伏せたような形をし、天井の丸い、床の四角な單室の石炭窯で、私が踏査したいくつかの宋や遼の古い窯もこれとほゞ同じ様式のものである。例えば遼三彩や鷄冠壺を焼いた滿洲で最も重要な赤峰の乾瓦窯などは二十日近くかゝつて慎重な發掘を行い、正確な實測圖もとつてあるが、今日の北支滿洲の窯と殆んどちがわぬ。私はかつて東蒙古の興安嶺に近い白塔子を旅した時、白塔子から三里ほどへだたつたエラスンゴロ溪谷に遼代の瓦窯址群があるとき、馬を走らせて調べに行つたことがある。歸途は荒模様となり、篠つく雨を冒して蒙古草原を矢のように疾驅した痛快な思出がある。エラスンゴロの瓦窯址群は高さ二十尺ほどの河岸に、五十ほど瓦窯址がすらりと列んでおり、地的には修武の窯に最もよく似ている。然しエラスンゴロの窯は地上に築かれた登窯で、はつきりとした窯床もあり通煙孔サマアキもあり、修武窯のような穴窯ではない。私が從來踏査した窯のうち修武窯に最も近いと思われるのは北京の西郊約八里の門頭溝にある琉璃廠や、熱河省承德の七窯村にある琉璃廠、即ち北京や承德の宮殿の色瓦を焼いた窯である。崖ぎわに北支風の窯床の四角い方形の窯が軒を列ねて十ほど列んでいる。恐らく修武の窯は穴窯ではなく、今日の門頭溝の琉璃廠と同じような様式の崖ぎわに築かれた北支風の石炭窯で、その源流をなすものではないかと想像している。

また修武窯は恐らく石炭で焚いていた窯であろう。周知のように北支では宋以來概ね石炭で窯を焚き、また北支滿洲の製陶地は殆んどすべて同時に炭鑛地でもある。このことはかつて拙著「陶磁器に現はれた支那の南北」(美術研究 一四三號)に詳しく述べたことがあるが、修武窯もその一例で、修武、焦作附近一帯は北支有数の炭鑛地で戦前には英國系の有名な石炭會社があつた。スワロー氏もこの會社に關係して焦作鎮に赴任したわけで、北宋時代修武窯はこの豊富な石炭を利用して盛んに焼いていたのであろう。

玉村の東には窪邨・南には劉掌・焦口といった部落があり、當陽峪の廣い谷は現在一面の畑となつていようである。黃土地帯を耕している貧しい北支農民の生活が想像出来るが、今日この谷には窯はないようである。然し私は先年北支を旅した時、修武の近くには磁州窯風の白化粧した苦力用の安茶碗を焼く窯があると聞いた。明確な地點はきかなかつたが、今でもこの附近には修武窯の流れをくむいくつかの窯があるようである。私の踏査した柏山の窯もその一つである。昔有名だつた製陶地には多くの場合今でもその近くに窯がある。定窯・汝窯・均窯・龍泉窯・撫順窯・江官窯などはその一例であるが、作風には天地雲泥のちがひがある。

スワロー氏の報告によると谷の奥に北宋の崇寧元年白という當時最も有名だつた名工が建てた玉帝廟という祠があるようだが、これは縣志にもものつてゐる。修武縣には玉帝廟という祠が二つある。一つは

玉帝廟 在城東北小丹河西岸

とある修武縣治の東北一里たらずのところにある祠で、この地方ではこの方が有名のようだが、これは修武窯とは關係のない玉帝廟のようである。縣境太行山全圖にはこれとは別に當陽峪の奥、太行山脈の中腹に、玉帝廟と書いた小さな祠がある。崇寧元年名工白が建てた廟はこれのようだが、この祠に就いては修武縣志には何の記述もなく、縣志金石志の條にもその碑文ののつていないのは残念なことである。

次にカールベック氏の報告によれば修武窯址からはいろいろ珍しい陶片が発見され、スワロー氏も澤山優秀な陶片を蒐めていようである。修武窯で何を焼いたかを知るにはこれらの陶片を見るにしくはない。カールベック氏が採集した陶片は歐洲に持ち歸つたようだが、スワロー氏が歿した後、氏の蒐めた陶片がどうなつたかわからない。私は北京や大阪や東京で修武の窯址で採集したものにちがいないと見ている一群の陶片をいくつか見ている。或いはこれはスワロー氏のなきあと分散したものがそこへにちらばつたのではないかと想像しているが、勿論そうでないかも知れない。然しこれらの陶片はどれもすばらしく、また修武以外と思われる陶片がまじつていないので、とにかく修武の窯址で採集したものにとらんでゐる。その一つはかつて北京で見た佐藤汎愛氏所藏の一群の陶片である。佐藤氏は清河鎮出土といわれていたが、私は恐らく鉅鹿とともに有名な河北省の清河鎮ではなく、修武に近い河南省の清化



鎮の間違いだらうと思つてゐる。そして清化鎮という意味は清化鎮附近、即ち修武の窯跡から出土した意味だろうと解している。私は鉅鹿の遺蹟も踏査したが、もし河北の清河鎮から出土したものとしたら、一つの窯のものばかりが集つてゐるわけではない。必ず定窯や汝窯や影青や磁州などの雜器もまぎつてゐるものだが、佐藤氏の陶片には修武窯以外と思はれる陶片は一片もなかつたように記憶する。また北京の古美術商の陳鑑塘チンケンタン氏のところでも同じような一群の陶片を見たし、大阪市立美術館にも修武窯の一括陶片があり、最近には杉山定敏氏が入手されたものを見てゐる。杉山氏の陶片のうちには定窯・越州窯・南宋官窯などの優片が數點まぎつていたが、主體をなす一括陶片はすべて修武窯のようである。私は主としてこれらの陶片を基礎に修武窯とその他の窯とを區別しているが、カールベック氏が述べてゐるものゝ他、私が今修武窯に比定してゐる陶磁器を列挙し、その解説を試みてみたい。

## 五

修武窯の遺品はこれを三大別してA定窯風の白磁、B均窯風の陶器、C從來磁州窯とされてゐた所謂繪高麗・白地黒搔落手・白搔落手・練上手・宋三彩・宋赤繪・綠釉陶・其他にわけることが出来る。

### A 定窯風の白磁

修武窯の白磁は定窯の白磁ほど遺品が多くないが、私もいく點か見てゐる。圖版第三上荻田朝雄氏所藏の白磁共蓋小壺はその一例だ

が、田澤坦氏もこれと全く同じ小壺を所藏されている。修武窯の白磁は定窯の白磁によく似てゐるが、器地が更に白く、また器地の長石分が更に多いためか、一層に磁化した感じがある。釉薬は定窯よりもやわらかく、光澤が強く、また貫入のあるのが定窯とちがう點である。貫入は荒いものもあれば驚くほど細密なものもあり、これは釉薬に唐土、即ち炭酸鉛が入つてゐるためであらう。釉色はうすクリーム色を帯びたものもあるが純白に近いものもあり、荻田氏所藏の小壺は純白に近い一例である。一言でいえば定窯よりも更に白く、釉薬に貫入のあるのが定窯とちがう點である。

荻田氏所藏の小壺や田澤氏所藏の小壺は蓋表、胴全面にこまかい幾何學的な刻文があるが、この文様技法は修武窯の一つの特徴だといえる。一見金篋の先でもコツコツ器用に刻んだように見えるが、一々刻んだのではこのリズムと力と均一性は出てこない。これは圖版第三下の從來我々が磁州窯としていた黒地に白い點を連ねた、俗に飛白文、千點文などと呼んでゐる手と全く同一の技法で、石黒宗麿氏の話によると、轆轤に据え、先をまげて尖らした弾力性のあるカンナ(陶用語 細長い鐵の板)をあてると、反射的にカンナが躍り、わけなくこの文様が出来るといふ。轆轤の廻轉が早ければ荒く、ゆるければこまかく、最も簡単な最も効果的な文様だとの意見である。

修武窯の白磁は白無地のものよりは寧ろこれに鐵繪文様を施したものの方が多く、またこの手に定窯を凌ぐような名品がある。圖版第四上クリーブランド美術館所藏の黒地毛彫牡丹唐草文白磁瓶はそ

の一例で、高さ一尺三寸六分、技法的にいえば白磁の胴に鐵繪具を塗り、これを搔落して流麗な毛彫文様を表わし、その上から白釉をかけたものである。私は實物を見たことがないが、これを實見した繭山順吉氏の話によると、米國で最も驚いたものゝ一つで、器地・釉藥・技法・鐵繪具・貫入の調子は挿圖第一横河博士が國立博物館に寄贈された

白覆輪黑地牡丹文平茶碗

(徑四寸四分五厘)

そつくり

だそうである。

この平茶碗は高麗古墳から出土したもので、一説に高麗白磁ではないかともいはれているが、從來漠然とやはり磁州窯にされていた。器地釉藥は修武の白磁の特徴を最もよく示し、ともに今私の修武窯と見做している白磁である。

圖版第四下はニューヨークのマイヤー氏所藏のやはり修武窯ではないかと見ている白磁だが、外側全面に精巧な牡丹唐草文を浮彫とし、彫取つた部分に黑繪具を埋めたもので、かつて類例を見たこと

挿圖第一 修武窯白覆輪黑地牡丹文白磁碗 國立博物館藏

のない珍らしい白磁である。内面が碗形にへこんでいるので硯ではなく、鉢でものせた台のようなもので、形としても珍らしいものである。杉山定敏氏が所藏する修武窯と推定される一括陶片のうちこれと同じ白磁片(圖版第七陶片一・三)があり、繭山氏の話だとマイヤー氏の白磁と器地・釉色・技法が全く同一だとのことである。またクリーブランド美術館の花瓶よりは焼いた火度が高いためか、かたい感じだが、同じ窯、同じ時代のもつと見做してよいとのことである。とにかく修武窯の白磁のうち最も精巧で、定窯にも見ない上手なものである。

カールベック氏の報告によれば修武の古窯址からは白磁の人間・動物・塔・小さな壺・水注類を象つた玩具がいろいろ出土するようだが、私もちよいちよいこの手を見ている。北京の佐藤汎愛氏が今考えるところで修武と思う陶片を百數十片秘藏されていたうちに、長さ一寸ほどの白磁の羅漢の首があつた。かつて陶器でこんなすばらしい彫刻を見たことがなく、無心をいつて割愛していたのだが不幸戦災で焼失したことはかえすがえすも残念である。修武の白磁の玩具らしい小さな壺や花瓶や水注を戦前には時々そここの蒐集で見た。白磁に漆黒の簡單な唐草だとか、椽に一本黒い筋をめぐらし、その上にやわらかい小ひゞのある釉藥のかゝつた、如何にもかわいらしい小品が昔はちよいちよいあつた。當時どこの窯か見當がつかなくつたが、今考えるとどれも修武窯のようである。

カールベックは修武の古窯址でたつた一片白磁の器地を黒化粧し、その上から栗色の釉藥をかけた上手の破片を發見したと報告し

ているが、定窯に黒定があるように、修武の白磁にも黒釉のかつたものがあるようである。この記事を見てすぐに連想したのはユーモルフォポロス翁舊藏のすばらしい黒い鐵鉢である。ユ翁圖録第二卷のつている原色圖版を見ると、黒というよりは黒栗色で、底の平らたい點カールベックの記述と符合する。定窯よりは作が更に薄く、どうも修武窯のような気がする。勿論實物も窯址出土の陶片も見たことのない私にこれを論ずる資格はないが、従来黒定とされていたものももう一度検討する必要がある。

猶私は修武の白磁で非常に珍しいものを見たことがある。たしか昭和二十三年の秋だつたと記憶するが、小林一三翁が特に私のために宋の器だけで茶をするからと招かれたことがある。床には「茶入」の二字の横物をかけ、花生も宋窯、水指も宋窯、鉢も宋窯だつたが、その時使はれた茶碗はかつて見たことのないものである。形や内面の型押文様は北宋の汝窯によくあるものだが、器地は白磁で、椽を四五分白くのこし、内外面とも茶褐色の釉薬がかつてゐる。薄手の上作なもので、茶をのんではおいしくなかつたが、とにかく珍しい茶碗である。その後も時々思い出してどこの窯のものかと考えていたが、今ではたしかに修武窯に間違いないと思つてゐる。純白の器地やこまかい貫入のある點は挿圖第一白覆輪黒地牡丹文碗と同じように記憶する。

猶修武の陶片には一見定窯の白磁をつくりだが、實は卵殻色の陶胎で、その上に白磁土を化粧し、これに定窯をつくりの刻文様を施

したものなどもある。例えば圖版第七、陶片一・2、4はその一例だが、貫入もなく、文様作風は定窯と殆んど區別がつかない。

また練上手は白磁と赤土を練上げたもので、修武窯でも特に上手のものゝようである。器地からいえば一種の白磁であらうが、従来磁州窯とされていたので、Cの項で説くことにしたい。

即ち修武窯では定窯風の白磁・黒磁の他、磁州窯風の白磁もあり、更には汝窯風の白磁も焼き、磁器だけでもその作風に變化の多いのに驚く。

#### B 均窯風の陶器

修武窯で均窯まで焼けているとは全く想像もしなかつた。殊に均窯のうちでも特に珍重している挿圖第二の類の植木鉢・水盤の手がこの窯で焼けていると聞いて驚かないものはなからう。

均窯の破片は北支滿蒙各地の遺蹟にひろく散布している。私は昭和十六年磁縣の臨水で宋代の古窯址を發見した時、同じ地點で均窯の破片を發見したことがある。従つてカールベック氏が修武の窯跡で均窯片を發見しても、必ずしも修武の窯で焼けたとはかぎらない。然しカールベック氏は明確に色見と思われるものを澤山に發見採集し、これを報告の中にも圖示しているが、これはたしかに色見に間違いないようである。そのうちには番號を附したものもあり、その色見に限つて特に上手だとのことであるが、どうも底に番號のある均窯の植木鉢・水盤の類(挿圖第二)はこの窯のようである。

この類の古來特に珍重し、また市價も特に高い均窯が果していつ

どこのものかよくわからなかつた。この手は均窯のうち特に釉色作行が優れているので俗に官均窯と呼んでいるが、均窯に官窯があつたという記録はない。デヅキッド卿なども「どこか窯のちがう、時代の降る一種の均窯ではないか」という意見のようだが、私も昔は先ず器地が汝窯とちがひ、作風も特殊だし、形にも宋の概念と相容れないものがあるので、或

は清朝になつて景德鎮の官窯あたりで作つたものではないかという疑をもつたこととがある。その後この意見は正しくないと反省するようになったが、どうもこのもののかはつきりとしなかつた。まあまあ汝窯か東窯あたりの特別の窯で、こんなものも焼いたのかなと思つていたが、これが修武窯であろうとは思ひもよらなかつた。

然し私はこれを修武窯ときいて始めてうなずける點がある。先ず器地が普通の均窯のように陶質でなくて磁質に近い。假りに汝窯で焼いたものとするれば、この手だけ器地のちがう點がどうもうなずけなかつたが、修武はいろいろと白磁も焼き、これをどうにでも變化させる技術にも長じていた窯である。また釉薬も普通の均窯よりは

挿圖第二 均窯 茄紫 三足水盤

鮮かだし、いろいろ苦心のあとがうかゞわれ、よほどの名工のいた窯でなくては出来ない仕事である。私自身發見したわけでないのて確固とした自信がもてないが、植木鉢水盤の手の均窯も亦恐らく修武窯で焼けたものであろう。

カールベックの報告によると、修武窯では俗に元均窯とよんでいる釉薬が腰までしかかゝつていない、少々下手の均窯も焼いているようである。器地は灰色の堅緻な半磁胎だとかいてあるが、從來汝窯で焼いたと解されている均窯との區別がどうしてもつかない。これは兩窯址出土の均窯を比較しなくては誰にもわからないことである。従つて從來均窯とよんでいるものゝうちには、修武窯で焼けたものもあり、汝窯で焼けたものもあり、後に鈞州即ち今日の禹州で焼いたものもあるわけである。この他私は河南省彰徳の西南約八里ほどの地點に均窯風のやきものを焼いた窯が發見されたという話を聞いたことがある。また熱河の大名城、即ち遼の中京の近くにも均窯風の陶器を焼いた窯があるとのことだが、これには多少疑いをもっている。所謂均窯風の陶器は磁州の繪高麗ほど一般的ではないかも知れないが、かなり方々で焼いたようである。その大部分はただ我々にわかつていないが、とにかく修武窯でも焼いたようである。

### C 從來磁州窯とされていたもの

修武窯の遺品のうち數からいつて最も多く、また作風の主體をなすのは從來磁州窯とされていたものである。

カールベックの報告によると、修武窯址からは、從來磁州窯とさ

れていた、

- 1 練上手 白磁と赤土と練合わせたもの。
- 2 繪高麗手 白化粧した上に黒または褐色で奔放な文様を描いたもの。
- 3 白搔落手 白化粧を搔落して文様を表わしたものの。
- 4 宋三彩手 白化粧し、これを刻して文様を表わし、その上から白、黄、緑の低火釉をぬりつけたもの。

等が出土しているようだが、この他私は

- 5 練上手の上に低火度の色釉をかけたもの
- 6 白地黒搔落手、器地を白化粧し、その上に黒繪具をぬり、これを搔落したり、これに刻線を加えて文様を表わしたもの
- 7 白搔落手に餡釉をかけたもの
- 8 繪高麗・白搔落手・白地黒搔落手などに低火度の緑釉をかけたもの
- 9 堆線文手、白磁土を盛り上げて線文様を表わし、その上から黒餡色の釉薬をかけたもの
- 10 宋赤繪・白化粧して一たん焼き、その上に赤・緑・黄などの低火釉で上繪付を施したもの
- 11 其他

等も修武窯で焼けたと見ている。

1 練上手は白磁と赤土を練合わせたもので、一名木理文または鶉手ともよび、歐米では marbled ware とよんでいる。従来練上手は漠然磁州窯とされていたが、スワロー、カールベック兩氏の発見によつて修武窯であることは疑いの餘地がないようである。また

北宋の修武窯

例えば挿圖第三の練上手の碗を見ても、また圖版第七陶片二・1、2にかゝげた杉山氏所藏の陶片を見ても、椽や高台の白磁の部分は修武窯の特徴をよく示し、純白の磁質で細密な貫入がある。練上手には様式からいつて唐に遡るとみられているものもあり、また例えば蒙古の百靈廟出土の練上手陶片のように明確な元の遺蹟から出土したものもある。

挿圖第三 修武窯練上手碗

修武窯では唐風の低火度の色釉のかゝつた練上手もやき、白が濁つて灰色を帯びた元時代のものも焼いている。従来唐の練上手とされてきたものは寧ろ北宋のものゝような氣がするが、

とにかく練上手はかなり長い間修武窯で焼いたようである。

2 繪高麗手。器地を白化粧しその上に黒または褐色で奔放な鐵繪文様を描いた俗に我國でいう繪高麗は、磁州窯の特徴で、たしかに磁州窯でも焼いている。同時に修武窯でも焼いているようだが、

カールベック氏の記述だけでは例えば6白地黒搔落手とよんでいる上手の繪高麗をさしているのか、磁州窯風の下手の奔放な繪高麗をさしているのかよくわからない。修武窯と思われる陶片の大部分は6白地黒搔落手で、下手の荒い文様のものは餘り見ないが、實際窯址を踏査したわけではないのでつきりしたことがいえない。下手の均窯と同じように、修武の繪高麗と磁州の繪高麗との區別がどうも私にはまだはつきりとのみこめないが、とにかく同じ繪高麗でも修武のものは、磁州とは比較にならないほど優れているようである。

3 白搔落手。器地を白化粧し、これを搔落して文様を表わし、その上から白釉をかけた俗にいう白搔落手は、磁州窯でも焼いているし、修武窯でも焼いている。昭和十六年私は現在磁州の窯のある彭城鎮の東約一里の臨水で、宋代の古窯址を發見したが、その時白搔落手の陶片を數片發見した。また修武と推定されるものにも澤山白搔落手があるが、これを比較していえることは修武の方が遙かに上作で、文様も精巧だし彫も深い。圖版第五にかゝげた白搔落黒象嵌牡丹唐草文瓶(右)、白搔落牡丹唐草文瓶(左)や圖版第八陶片三にかゝげた白搔落手の陶片はいずれも修武窯と思われるものだが、磁州窯址出土のものにくらべ遙かに優れている。また白搔落手の中には、例えば圖版第八陶片三の比較的大きな唐草地魚文陶片(3)のように、特に文様の部分だけ器地の上に鐵分の多い赤土を化粧し、その上に白化粧し、これを搔落して文様を表わし、その上から弱い白釉をかけるといった複雑な技法を用いて、文様効果を強めたもの

などもある。とにかく製作になみなみならぬ工夫と苦心をしたものが多いとある。

4 宋三彩手。俗にいう宋三彩も従来磁州窯ではないかとされてきたが、カールベック氏の報告で、修武窯であることが明らかとなつた。宋三彩を磁州でも焼いたかどうかはつきりしないが、恐らく焼いていないのではな

挿圖第四 宋三彩蓮花文陶枕

かろうか。唐三彩は修武から黄河をへだて、僅かの距離にある洛陽で焼いたのだから、修武の宋三彩は洛陽の唐三彩の直系のようにも思われる。宋三彩は遺品としては枕が最も多く、挿圖第四はその一

例である。焼いた火度が低いため器地が赤みを帯びているのが特徴だが、カールベックの報告にもこのことを述べている。器地を白化粧し、これに鮮やかな線彫で魚・鳥・牡丹・蓮といった文様を描き、その上に白・黄褐・緑などの低火釉をぬりつけているが、綠無地のものもよくある。非常な數焼いたものらしく、偶目する遺品だけで

も相當の數である。大部分は北宋と思われるものだが、南宋の年號のあるものもあり、底に元の年號を墨書したものもある。どれも修武窯ではないかと思われるので、宋三彩風の器は少くも元時代、或いは明になつても修武窯で焼いていたかも知れない。

5 練上手の上に低火度の色釉をかけた陶片を杉山氏が二片所藏している(圖版第七陶片二・三)。一つは外側に綠色の低火釉がかゝり、内面には黄褐色の低火釉がかゝつている。もう一つは内外面とも黄褐色の低火釉のかゝつたものである。唐の様式をもつた練上手で、黄褐色の低火釉をかけたものをよく見るが、従來この手は唐三彩を焼いた洛陽北邙山の窯ではないかと想像していた。然し杉山氏のこの陶片を見ると恐らく修武で焼いたのではないかと思われる。これはただはつきりときめられない問題で、他日の研究に俟つことにしたい。

6 白地黒搔落手。カールベック氏は修武の窯跡で挿圖第五に示すようなすばらしい陶片を採集している。この類の陶片は陳鑑塘氏の挿圖第五 カールベック氏が修武窯址で採集した白地黒搔落手陶片

の蒐めていた一群の陶片の中にも澤山にあり、また圖版第八陶片四に示すように杉山氏のコレクションにもいろいろとある。従來この類の陶器は我國でも中國でも歐米でも、磁州窯のうち特に優れたものと解してきた

が、果して磁州窯であるかどうか疑問である。寧ろその大部分は修武窯かも知れず、カールベック氏は磁州窯を模したと解釋しているようだが、果してこの原型をなすものが磁州窯にあるかどうかも疑問で、従來磁州窯に就いて抱いていた我々の概念を改めねばならないような氣がする。例えばカールベック氏が修武窯址で採集した挿圖第五の陶片と、「宋磁」所載の細川家所藏の白地黒搔落花鳥文壺を比較すると、或いは同人の作ではないかと思うほどよく似ている。また圖版第六にかゝげた細川家及び恩賜京都博物館所藏の黒搔落手の瓶は杉山氏所藏の陶片(圖版第八陶片四)と器地・釉藥・黒繪具・白化粧・技法・文樣などが全く同じで、これら従來磁州窯の名品とされてきたものはすべて修武窯のようである。

7 白搔落手に飴釉をかけたものを俗に芝麻醬と呼んでいるが、圖版第七陶片二・7、8に示すように、この類の陶片も修武の窯跡から發見されている。従つて私が磁州窯として「宋磁」第三五圖にのせた飴釉七寶唐草刻線文瓶なども或いは修武窯かも知れない。

8 繪高麗・白搔落手・白地黒搔落手などに低火度の綠釉をかけたものがいろいろとある。イギリスのユーモルフォロス、フランスのリビエールの圖録にもいく點かのつてているが、拙著「宋磁」第四一圖にのせたもの、他我國にも相當渡來している。卷頭に原色圖版でのせた綠釉白搔落彫花文大花瓶は、高さ五四・五釐 かつて類例を見たことのない雄作で、形もよく文樣もすぐれている。たゞ残念なことには頭から上は後補だが、世界的絶品として推擧すべきもの

であろう。この種の緑釉陶のうち 數からいつて一番多いのは白搔落手に緑釉をかけたものだが、白地黒搔落手や繪高麗に緑釉をかけたものもある。圖版第七陶片二・10に示すように器地を白化粧し、その上に全面黒繪具をぬり、これに線刻で草葉風の文様を描き、その上から緑釉をかけた、一見黒地に緑の線文様があるように見えるものもある。

9 堆線文手は壺に多いが、豎に平行線を白磁土で盛り上げ、我國のいつちん盛りの技法によるものと思われ。その上からずつぱりと黒飴釉をかけたものである。線のところだけ高いため黒飴釉が流下して白い器地を出したり、茶色にこげ、一見黒地に白筋の文様や茶色の筋があるように見える。全面平行線でくるんだもの、他、四方に四本づゝ平行線を加えたものもあるが、いずれも近代的な感じの印象的なやきものである。圖版第七陶片二・6は修武窯址で採集されたと推定されるもので、器地は暗褐色を帯び、漆黒の地に茶色の筋が豎に三本入つてゐる。

10 宋赤繪は東洋最古の赤繪とされているが、これがどこで焼けたか今猶疑問である。周知のように従來磁州窯だろうとされておられ、私もこの説に従つてはいたが、久しく以前から磁州窯とはどうも器地がちがうような氣がしていた。磁州窯よりは赤味が強く、概して焼いた火度が少々低いようである。カールベックの報告にも修武窯で宋赤繪を發見したとはかいてない。スワロー氏の發見した文獻には

崇寧年間に焼いた磁器は特に光澤が強く、當時玉村には百以上の陶工の家が

あつた。いろいろの色釉を焼いていたが、そのうち特に紅と白とが有名である。

とあるが、こゝにいう紅が赤繪の意味か、紅定の紅のように柿釉の意味かよくわからない。宋赤繪がいつ創始され、どこで焼けたかは今にわかに斷定出来ない問題だが、私はどうも修武窯のような氣がしてならない。その

第六圖挿 宋赤繪牡丹文碗

理由の第一は修武窯は作風に最も變化があり、技巧の特に優れた窯で、特に低火度の色釉にかけては天下第一の窯のようである。第二は宋赤繪の器地はどうも修武窯に一番近いよ

うである。第三には有名な泰和元年銘の宋赤繪の他、すぐれた宋赤繪は多く清化鎮、即ち修武方面から出土するということを古くから聞いている。然し宋赤繪の白化粧は北宋の修武窯ほど純白でない。これは實際には白化粧は同じかも知れないが、その上にかけて白釉が不純なために黄味を帯びている。また概して作行も厚く、施釉も厚く、器地が少々荒く、形も北宋の修武窯のようにひきしまつてい



ない感があるが、私はこれは北宋と宋赤繪を多く焼いた南宋または元との時代的相違で、窯は同じ修武窯ではないかと想像している。然しこれは大膽な私の臆測で何等はつきりとした證據があるわけではない。重要なこの問題の解決は今後の発見、研究にまたねばならないが、卒直に私の意見を述べることにした。

11 其他修武窯ではいろいろ珍らしいものを焼いているようである。例えば挿圖第七に示すように白化粧の中に赤土をまぜ、これを墨流し風にしたものとか、また圖版第七陶片二・4に示すように、墨流し風の化粧の上に紺碧の青釉をかけたものとか、また圖版第七陶片二・5に示すように、鐵分の多い赤土の上に白土で唐草をちらし、その上から低火度の飴釉をかけたものとか、いろいろの技法を用いたものがある。

以上は従來磁州窯とされていたものうち、今私が修武窯ではな

挿圖第七 修武窯 白地 墨流 文瓶

いかと考えているものを列挙したのだが、その種類の多く、作風の變化に富み、どれを見てもそれぞれ優れているのには驚く。

これを要するに修武窯では定窯風の白磁もやき、汝窯風のものもやき、均窯風の美しい陶器もあれば、磁州窯風のものもいろいろとある。そして中には定窯・汝窯・均窯を凌ぐ名作もありまた従來磁州窯とされていた名品の大部分は修武窯のようである。

## 六

修武窯は従來全くその名の知られなかつた窯であるが、とにかく北宋で修武窯ほど作風に變化のあり、文様のすぐれ、色彩の豊富な窯はないようである。たとえば修武窯の代表的な作風である白地黒播落手にしても、かつて一つとして同じ文様のものを見たことがない。また宋三彩にしても千變萬化、自由奔放な意匠力のたくましさに驚く。端巖崇高なものもあれば、淨明簡潔なものもあり、絢爛多彩なものもある。中には驚くほど複雑な技巧を弄したものもあるが、それでいてどれも藝術的な香りが高く、精神的な高さのあるのは不思議なようである。ひとり北宋ばかりでなく、二千年の中國陶磁史を通じて、修武窯ほど作風に變化のあり、意匠文様のすぐれている窯は他にないようである。またカールベック氏の話によれば、古窯址が四百以上もあるとのことだが、かつてこんな澤山の古窯址の聚落しているところをきいたことがない。作風の優れていたと同時に生産量も驚くほどの額だったのだろう。修武窯には白・陳・陶とい

つた拔群の名工がいたようだが、凡工が作つた普通の作品と思われるものでも、他の窯とくらべると遙かにすぐれていたようである。

定窯・汝窯は北宋の双壁とされているが、私は定窯・汝窯以上に修武窯の遺品に深い愛着を感じている。定窯・汝窯ほどの品格はないかも知れないが、定窯や汝窯にない親しみを見る人々に感じさせ、何か不思議な生命力がこの窯の作品すべてに満ちあふれている。昔この土地が榮え、連日連夜酒宴を催したと傳えられるのは、當時も世人から深く愛され、その作風を高く評價した人が多かつたためであらう。定窯・汝窯は皇帝や政府の力で遠い道を中央と結ばれていた窯のようだが、修武窯は開封市民の需要と好みで密接なつながりのあつた窯のようである。そこに自ら作風のちがいが生じ、修武窯のもつ自由な生命、あたたかい親しみといったものゝ源泉があるような気がする。

修武に澤山の窯が起り、特に優れたものをいろいろと焼いたのは、勿論火・水・土といった製陶條件にめぐまれていたことにもよろうが、それ以上に北宋の首都汴京、即ち今日の開封府に近く、その豊かな經濟的支持があつたからであらう。修武窯は定窯・汝窯・磁州窯などよりは遙かに首都汴京に近い。日本里數で二十數里といえれば、ひろい中國では目と鼻の先である。當時政府直營の窯があつたといわれる陳留縣の東窯をのぞいては首府に一番近かつた窯である。東窯は宋會要にも記してあるように、北宋末期近くまでは瓦磚の類を焼いていた窯で、北宋の末、政府の力で起した一種の御庭焼

である。従つて首府汴京に最も近く、市民と最も密接なつながりがあつたと思われるのは修武窯であらう。

首府汴京は宋初以來久しく泰平の世がつゞいたため、歳とともに繁華となり、人口も著しく増加した。宋の社會は唐の貴族中心の封建社會から庶民擡頭の近代社會に移行したため、商工業が特に盛んとなつた。牙僧または紀記とよぶ大規模な仲買業が起つたり、飛錢とよぶ爲替法や交子とよぶ一種の紙幣が流通し始め、經濟機構が一變するとともに商業がにわか盛んとなり、商人の社會的地位も急に高まつた。十字街・潘樓街・竹竿市・榆林巷などには、豪壯な大商店が軒を列べ、麥稻巷・殺猪巷などの花街には當時二萬の妓女がいたといわれている。また桑家瓦子・中瓦子・裏瓦子などの盛場には大小五十餘座の寄席劇場があり、特に有名だつた蓮花棚・牡丹棚夜叉棚・象棚などはそれぞれ數千の觀客を收容出来たといわれている。酒樓・料亭の繁榮はめざましく、當時これを花茶房または人情茶房とよんでいたが、その規模は實に豪壯で、これらの店では概ね純銀の器を用い、時には純金の皿・鉢を使つて人氣を呼んだといわれている。陶磁器も亦當然妍を競い、優れたもの優れたものと市民の需要が高まつたろうが、歳とともに高まつてゆく汴京の需要を充たしたのは恐らく修武窯であらう。従つて修武窯の繁榮は首都汴京の繁榮をそのまま反映していたとも見ることが出来る。

修武の窯がいつ起り、いつ廢絶に歸したかは據るべき資料がない。

たゞ私は少くも神宗の熙寧四年(西曆一〇七二)から元の至元六年(西曆一三三九)ま

ではつゞいていた窯だと見ている。その理由は従来磁州窯とされていた大英博物館所蔵の、表に大きく家國永安と刻し、左脇に熙寧四年三月十九日の銘文のある白搔落手の陶枕挿圖第八はその作風から修武窯と推定され、また国立博物館にある至元六年の墨書のある元三彩兔文様盃陶器圖録七卷支那篇上第一三三圖も修武窯のものとしている。然し修武の窯の最も生々とし、また最も

優れたものゝ焼けたのは北宋末の政和宣和頃であらう。宋室の南渡とともに、定窯汝窯の衰微したのと同じように、修武窯も火の消えたような状態になり、これを契機に作風の著しくくすれたことは想像に難くない。ただ修武窯は定窯・汝窯の

ように直接政府の支持をうけていた窯でなく、もともと民營の窯であつたため、政治經濟の重心が南に移つても、猶命脈をつゞけていたものと思われる。南宋になつても北支で最も有力な、また作風の最も華やかだつたのはやはり修武窯であらう。

修武窯に就いては猶述べたい多くのことがある。最も重要な磁州窯との比較、東窯・定窯との比較、器地釉藥の特徴、文様の變化な

挿圖第八  
修武窯白搔落手陶枕 熙寧四年銘 大英博物館藏

どに就いても述べたいと思つていたが、與えられた紙數に限りがあるのでひと先ず擱筆することにした。